

県営かんがい排水事業関連発掘調査  
報 告 書

II — 1

1985.3

滋賀県教育委員会  
滋賀県文化財保護協会

## 序

滋賀県下の県営灌漑排水事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、ほ場整備事業の拡大に伴ない、その件数も年々増加し、本年度は8遺跡が対象となりました。

今回は上記の遺跡のうち整理の完了しました7遺跡を4分冊に分けて刊行するものです。

ここに、この報告書により、広く埋蔵文化財に関する理解と文化財愛護普及の一助にしたいと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解をいただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書の刊行にご協力をいただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課長

市 原 浩

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和59年県営灌漑排水事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、蒲生郡安土町新開遺跡、近江八幡市金剛寺遺跡の調査成果を収載したものである。
2. 調査は、滋賀県農林部の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 調査にあたっては、地元安土町役場、近江八幡市役所、各教育委員会、八日市県事務所をはじめ、地元関係者の方々から種々の協力を得た。協力を得た諸氏については、各遺跡ごとに記した。厚く感謝の意を表わします。
4. 調査は、滋賀県教育委員会文化部文化財保護課主査田中勝弘、技師葛野泰樹、同田路正幸を担当者として実施した。なお、新開遺跡については、安土町教育委員会技師石橋正嗣、同西家淳朗氏にお願いした。
5. 各章の文責は、各遺跡ごとに明記した。

## 目 次

I. 蒲生郡安土町新開遺跡	
1. 調査の契機と経過	1
2. 位置と環境	1
3. 昭和58年度発掘調査の結果	5
4. 昭和59年度発掘調査の結果	5
II. 近江八幡市金剛寺遺跡	
1. はじめに	7
2. 位置と環境	7
3. 調査経過	10
4. 検出遺構	11
1) 第1トレンチ	
2) 第2トレンチ	
5. 出土遺物	
1) 緑釉陶器	12
2) 灰釉陶器	13
3) 土師器	14
4) 黒色土器	16
5) 土錘	16
6. まとめ	16

## 挿図目次

### I. 蒲生郡安土町新開遺跡

第1図 新開遺跡調査位置図	2
第2図 昭和58年度トレンチ配置図	3
第3図 昭和59年度トレンチ配置図	4
第4図 トレンチ断面土層模式図	5
第5図 出土遺物実測図	6

### II. 近江八幡市金剛寺遺跡

第1図 金剛寺遺跡の位置と周辺の遺跡	8
第2図 調査トレンチ配置図	9
第3図 第1トレンチ遺構配置図	
第4図 第1トレンチSB0101実測図	10
第5図 第1トレンチSB0102実測図	11
第6図 第2トレンチ遺構配置図	
第7図 出土遺物(1)	15
第8図 出土遺物(2)	16

## 図版目次

### I. 蒲生郡安土町新開遺跡

図版一. 新開遺跡（昭和58年度）

1. 調査前遠景（東から）
2. T-1（東から）

図版二. 新開遺跡（昭和58年度）

1. T-2（東から）
2. T-3断面

図版三. 新開遺跡（昭和59年度）

1. 調査前遠景（北から）
2. T-1調査風景

図版四. 新開遺跡（昭和59年度）

1. T-1（北から）
2. T-2（南から）

図版五. 新開遺跡（昭和59年度）

1. T-3（南から）
2. T-4（北から）

### II. 近江八幡市金剛寺遺跡

図版一. 金剛寺遺跡

1. 遺跡遠景（東から）

2. 第1トレンチ全景（南から）

図版二. 金剛寺遺跡

1. 第1トレンチSB0101（東から）
2. 第1トレンチSB  
0101、SB0102（北から）

図版三. 金剛寺遺跡

1. 第1トレンチSK0101

2. 第1トレンチSR・1

図版四. 金剛寺遺跡

1. 第2トレンチ北半全景（SA0201、南から）

2. 第2トレンチ南半全景（SD0201、北から）

図版五. 金剛寺遺跡

出土遺物(1)

図版六. 金剛寺遺跡

出土遺跡(2)

# I. 蒲生郡安土町新開遺跡

## 1. 調査の契機と経過

昭和58・59年度滋賀県蒲生郡安土町大字常楽寺地先において、県営灌漑排水事業工事（安土地区常楽寺工区）の申請があった。当該地は琵琶湖岸に近い水田地帯で、「新開の森」を中心に早くから遺物の散布が周知されており、また、新開の森は帆立貝式古墳ではないかと想定されている。

のことから、工事実施前に遺跡の保存を講じる目的で発掘調査を行うこととした。工事は昭和58年度と59年度にまたがるため、第1次調査を昭和58年7月から昭和59年3月までとし、第2次調査を昭和59年4月から昭和60年3月までの期間で実施した。調査は文化財保護課が農林部耕地建設課より予算（昭和58年度立ち合い調査、昭和59年度921,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施し、現地調査は安土町教育委員会技師石橋正嗣、西家淳朗へお願いした。調査の体制は以下の通りである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課主査近藤 滉（昭和58年度）、主査  
田中勝弘、技師葛野泰樹、同田路正幸（昭和59年度）

調査補助員 昭和58年度 宮戸貴子、村田千恵子、設楽靖史、足達拓実

昭和59年度 村田千恵子、小西忠宏、設楽靖史、足達拓実

また、調査に当っては、地元常楽寺の方々の御助力をいただいた。ここに記して謝意を表します。  
(葛野泰樹 西家淳朗)

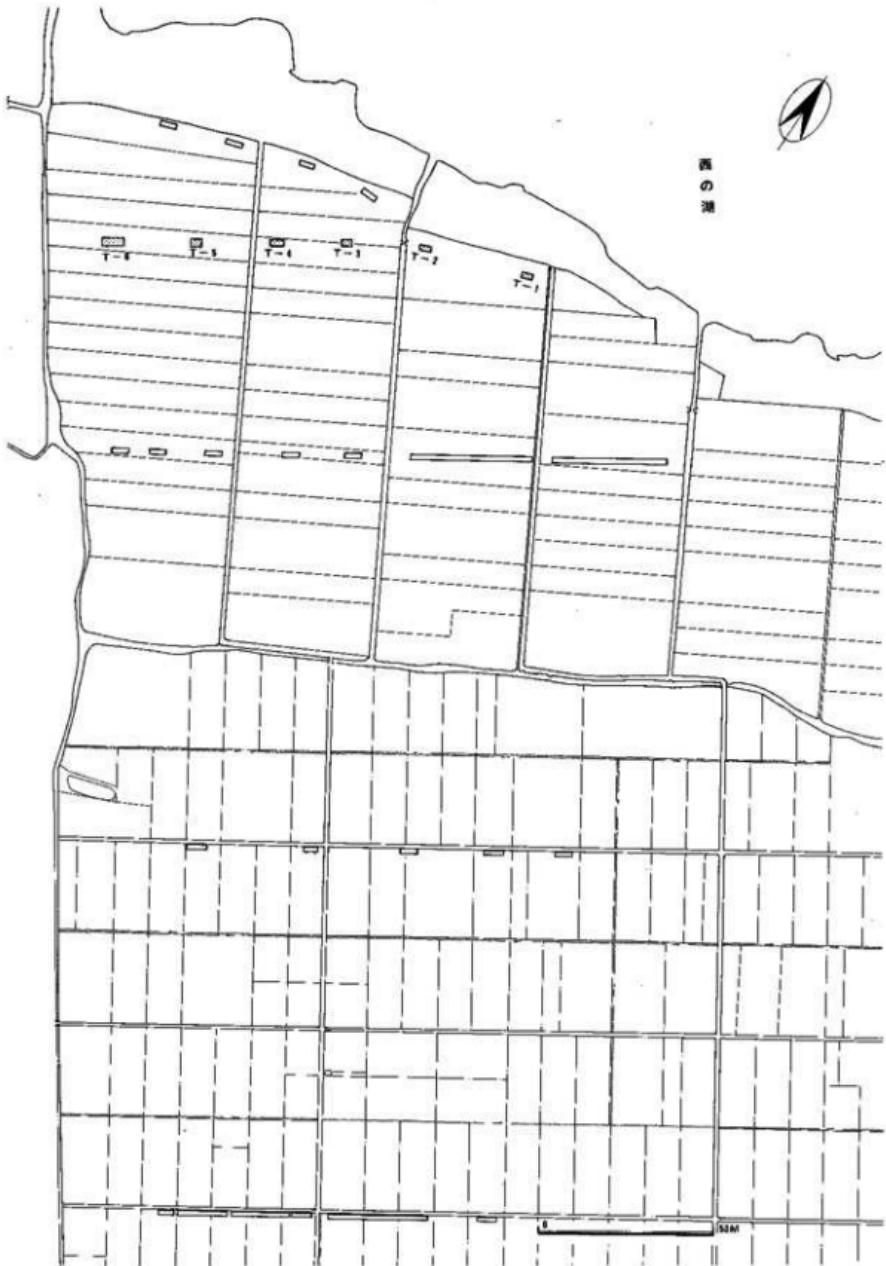
## 2. 位置と環境

新開遺跡は滋賀県蒲生郡安土町大字常楽寺に所在する。当該地は織田信長によって開かれた通称「朝鮮人街道」（主要地方道大津能登川長浜線）と西の湖とにはさまれた標高85～87m地点に位置し、現在、広大な水田地帯を形成している。その中にあって、遺跡は帆立貝式古墳と推定されている新開の森を中心とする微高地に立地し、この微高地は、安土町内を南北にのびる2条の舌状台地のうち、西側の舌状台地の先端部にあたる。舌状台地には南から慈恩寺遺跡、金剛寺遺跡、熊野神社古墳群などが分布し、さらに、台地上を包含するように安土城城下町遺跡がある。

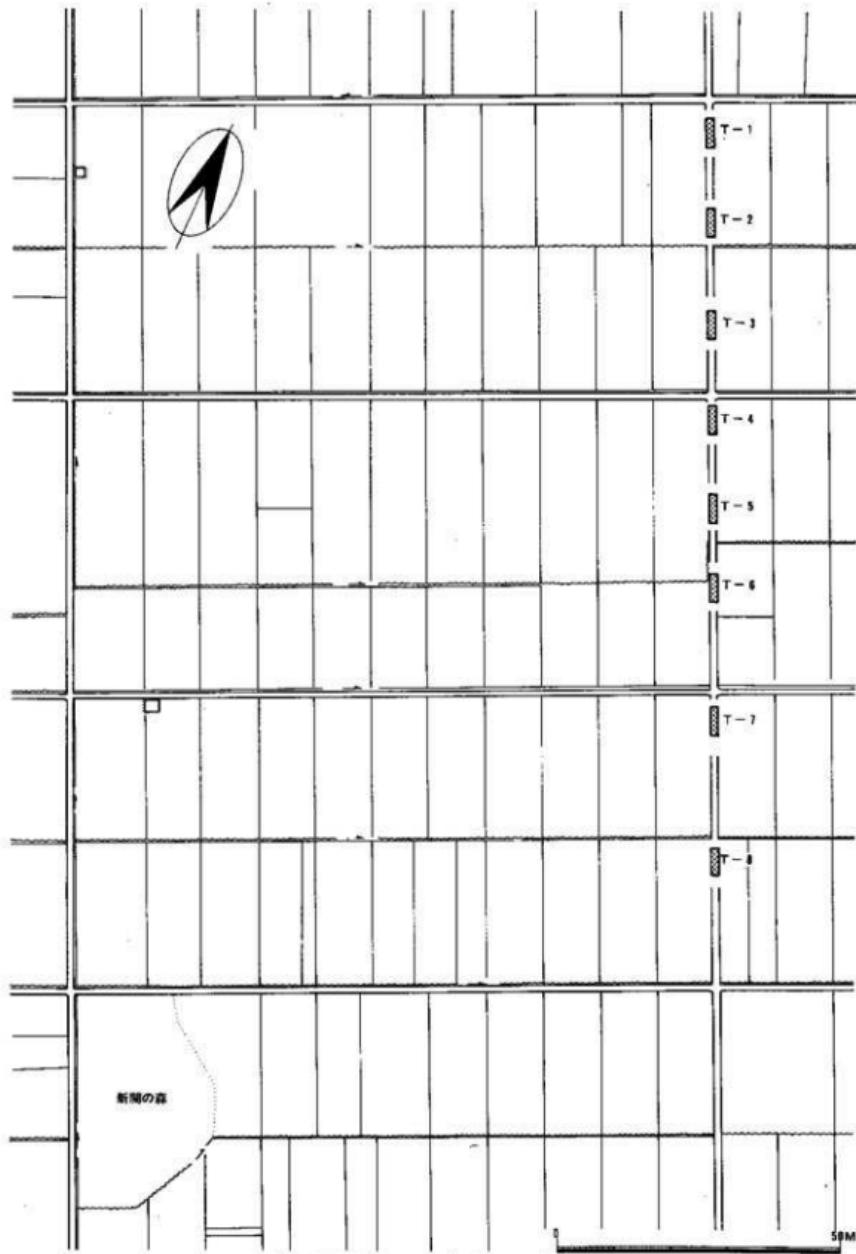
また、東側にのびる舌状台地の先端部は、当該地と似た形状を呈し、微高地には繩



第1図 新開遺跡調査位置図



第2図 昭和58年度トレンチ配置図



第3図 昭和59年度トレンチ配置図

文時代を代表する弁天島遺跡が立地し、その北側には弥生時代の農耕化を明らかにする史跡大中の湖南遺跡がある。

このように、琵琶湖岸に近い水田地帯には著名な遺跡があり、当然、当該地においても上記の遺跡と何らかの関連性をもつ遺跡の存在が想定される。 (葛野泰樹)

### 3. 昭和58年度発掘調査の結果

トレーニング配置図(挿図2)で示すように配管予定地に、試掘トレーニングを6ヶ所設定し、遺構の検出を試みた。その結果各トレーニングとも層位は、耕作土(20~30cm)、灰色粘質土(20~30cm)、暗褐色(黒褐色)腐植土(スクモ)(40~60cm)、青灰色粘土の層位が確認された。遺構、遺物の検出はみられなかった。

また、一部の青灰色粘土層を深掘し、下層の確認を行ったところ、地表下約200cmで青灰色砂層が認められたが、遺物等の出土はみられなかった。

以上の結果、新開遺跡が立地する織山西山裾に端を発し、北方へ延びる舌状台地は、今回の調査地まで延びていないことが判明し、付近一帯は湿地、あるいは西の湖に没していたことが推定される。 (西家淳朗)

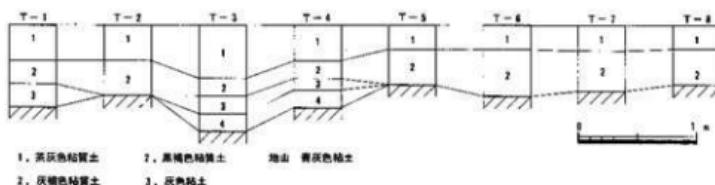
### 4. 昭和59年度発掘調査の結果

今回の対象地は、前年度調査で確認された新開遺跡の東辺部にあたる。

調査は配管予定地に3m×10mの試掘トレーニングを計8ヶ所設定し、遺構、遺物の検出を試みた。(挿図3参照)

その結果、挿図4で示す層位が確認されたが遺構は検出されなかった。遺物はT-1、第2層灰褐色粘質土から須恵器(No.1)1点(挿図5)が出土したのみである。

以上のことから、今回の調査地は織山西山裾に端を発し、安土町内を南北に走る2条の舌状台地、つまり大字中屋から小中、上豊浦、下豊浦へ延びるものとの間にあたる低湿地帯であると推定される。



第4図 トレーニング断面土層模式図



第5図 出土遺物実測図

現在までに安土町内で知られている遺跡の多くは、この2条の舌状台地上に集中している。しかし、同じ低湿地に形成される西才行遺跡の例もあり、また、全回の調査地北東の西の湖畔において、土師器の散布が認められる場所もあることから周辺部における地下遺構の存在が予想される。

(西家淳朗)

図版一 新開遺跡（昭和58年度）



1. 調査前遠景（東から）



2. T-1（東から）

図版二 新開遺跡（昭和58年度）



1. T-2 (東から)



2. T-3 断面

図版三 新開遺跡（昭和59年度）



1. 調査前遠景（北から）



2. T-1 調査風景

図版四 新開遺跡（昭和59年度）



1. T-1 (北から)



2. T-2 (南から)



1. T-3 (南から)



2. T-4 (北から)

## II. 近江八幡市金剛寺遺跡

### 1. はじめに

本報告は、昭和59年度県営かんがい排水事業に伴う近江八幡市金剛寺遺跡の発掘調査にかかるものである。

金剛寺遺跡は、佐々木六角氏の居館跡とされる金剛寺城跡の東に位置し、飛鳥時代から室町時代にわたる遺物の散布が認められている。ここに県営かんがい排水事業が実施されるにあたって、事前に発掘調査を行い、遺構の保護策を講じることとした。

調査は、滋賀県教育委員会が同県農林部から依頼と経費(4,440,000円)の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会に委託して実施した。

発掘調査にかかる体制は次のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 主査田中勝弘 技師葛野泰樹  
技師田路正幸

調査担当 同上田路正幸

調査補助員 崎 浩司 奥田浩人 井田泰弘 小杉昌史 岡治博之 和氣康之  
出路清久 福本光宏 西埜博 沢村栄治 山本智子 前川幸子  
山田晶子 松井和代

調査にあたっては、近江八幡市教育委員会をはじめ、滋賀県農林部、同八日市県事務所土地改良第二課、同市金剛寺町、西ノ庄町地区、同土地改良区、同市千僧供町、杉ノ森町の方々に多くの協力を仰いだ。また、近江八幡市教育委員会技師岩崎直也氏、同嘱託篠宮正氏、近江文化財研究所の諸氏には調査の全般にわたって多くの協力と教示を得た。とくに記して感謝する。

なお、本報告の執筆、編集には田路があたった。

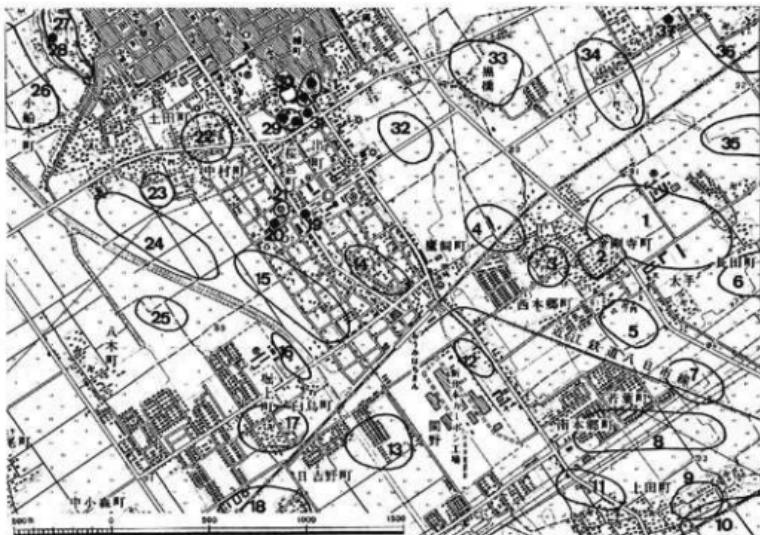
本文中で使用した遺構の略記号は次のとおりである。

SB：掘立柱建物 SD：溝状遺構 SK：土壤状遺構 SR：自然流路 P：柱穴  
SA：柱穴列

数字の上二桁はトレンチ番号を表わす。

### 2. 位置と環境(第1図)

金剛寺遺跡は、近江八幡市金剛寺町から杉ノ森町にかけて所在する。金剛寺町は近



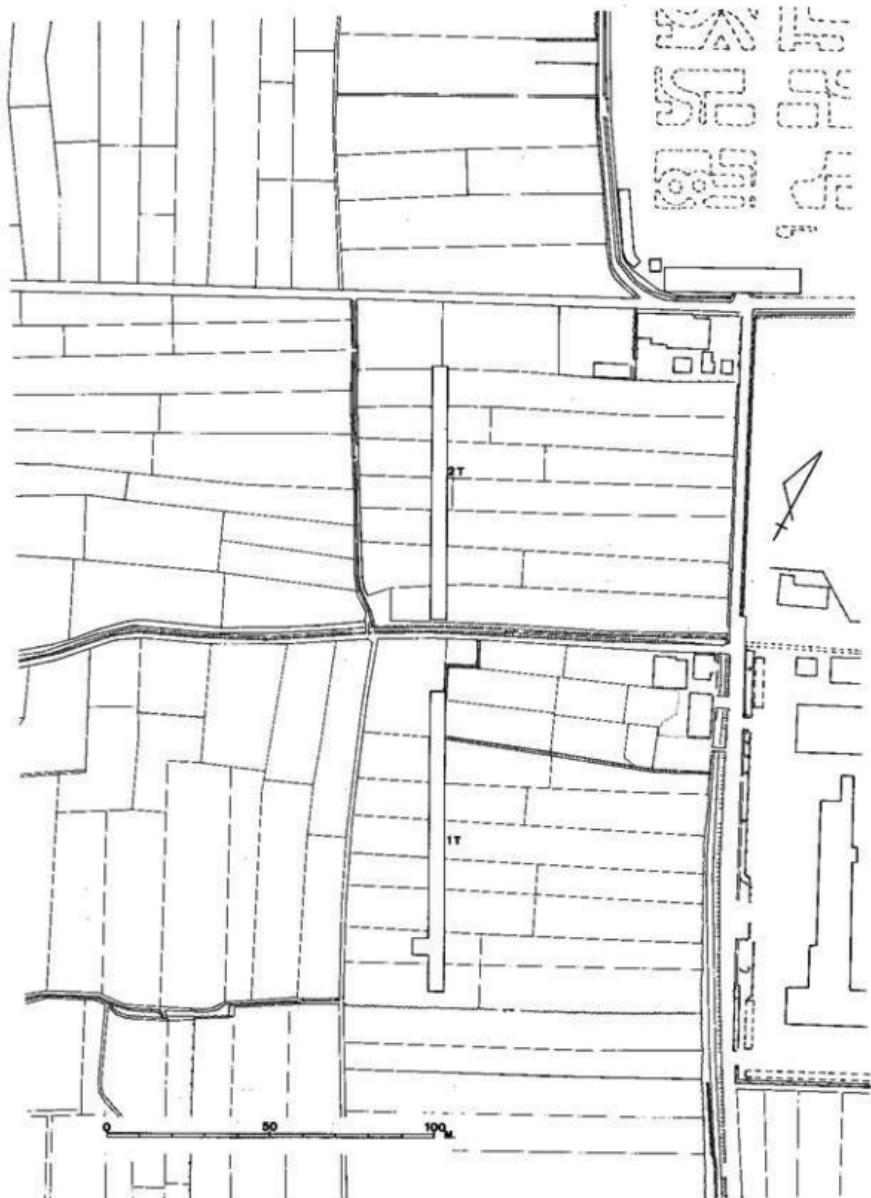
第1図 金剛寺遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 金剛寺遺跡
2. 金剛寺城遺跡
3. 九里氏館遺跡
4. 里ノ内遺跡
5. 宮ノ後遺跡
6. 大手前北遺跡(仮)
7. 西街道遺跡
8. 蔵ノ町遺跡
9. 上田氏館遺跡
10. 桂木原遺跡
11. 寒歎遺跡
12. 金瀬遺跡
13. 間野遺跡
14. 鷹飼遺跡
15. 東田遺跡
16. 森ノ前遺跡
17. 掘上遺跡
18. 日吉野遺跡
19. 七ツ塚古墳
20. 長塚古墳
21. ツバナ山遺跡
22. 宇津呂館遺跡
23. 土田遺跡
24. 北田遺跡
25. 南田遺跡
26. スデラ遺跡
27. 成就寺遺跡
28. 日杉山祭祀遺跡
29. 東漸寺古墳群
30. 八橋幼稚園遺跡(仮)
31. 一里塚古墳
32. 出町遺跡
33. 黒橋遺跡
34. 八甲遺跡
35. 北ノ森遺跡
36. 高木遺跡
37. 西床古墳

江八幡市の東部に位置し、標高は91m前後を測る。北流して西ノ湖に注ぐ、黒橋川と東方の蛇砂川にはさまれた微高地上に遺跡は立地している。

遺跡周辺は、旧蒲生郡金田村に属し、古代においては、付近に蒲生郡篠笥郷・篠田郷が、中世には佐々木荘が置かれた地域である。

金剛寺遺跡の東辺部に位置する金剛寺城<sup>(1)</sup>は、八日市市小脇町付近に本拠を置いていた佐々木六角氏が14世紀初頭前後に金田別館を設けたことにはじまる。1469年（文明元年）に一度、館は焼失しているがその後、再興され、戦火の拡大とともに城郭としての性格を強めた。現在も、周辺に「大手」などの城に因む小字名が残っている。



第2図 調査トレンチ配置図

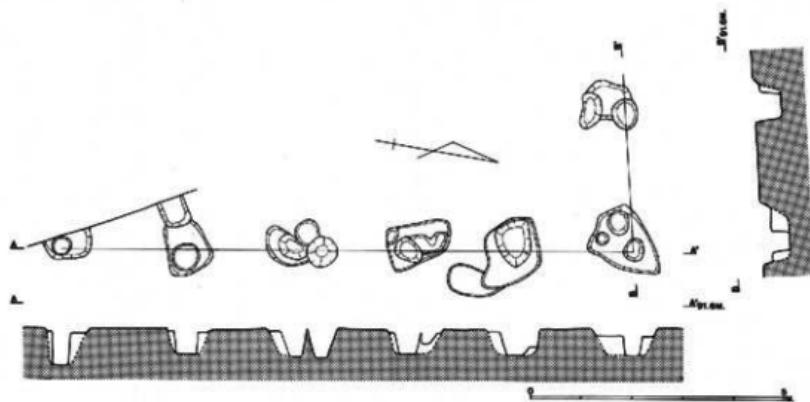
### 3. 調査経過（第2図）

今年度の調査地点は、遺跡のほぼ中央部にあたり、金田小学校の北側、県立八幡工業高校の西側部分である。南北方向のかんがい排水路敷に、南から第1・2トレンチを設けた。調査期間は昭和59年6月から7月にかけてである。金剛寺遺跡では、昭和58年度にも本調査の南側延長部分で発掘調査が行なわれ、平安時代前期を中心とした掘立柱建物群が確認されており、今年度の調査でも関連遺構の包蔵が予想されたために当初より全面発掘を行うこととした。調査は第1トレンチから順次、機械力による表土除去、遺構検出、写真撮影、実測作業などを行なった。遺構面はいずれも一面のみである。

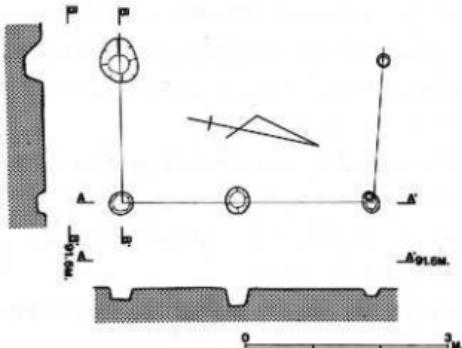
第1トレンチは、幅4.5m、長さ92mである。南端付近において、SK0101を検出したために西側に幅4m、長さ4.5mの拡張部を設けた。トレンチの大半で、耕土直下で黄褐色粘質土の遺構面を検出した。また、北端付近で、幅14m、深さ60~70cmの自然流路と思われる落ち込みを検出したが、遺物は含まれていない。

第2トレンチは、幅4.5m、長さ77mである。ここでも遺構面は、耕土直下（一部床土を含む）の黄青灰色粘質土であった。検出した溝、土壤の大半は現状の耕作等によるものであり、顕著な遺物の出土はなかった。

また、第2トレンチよりも北側、東海道線周辺については、県営ほ場整備事業に伴う調査で試掘トレンチを設けたところ遺構は検出されなかった。したがって、第2ト



第4図 第1トレンチ SK0101実測図



第5図 第1トレンチ SB0102実測図

レンチ付近が、金剛寺遺跡の北限と考えられる。

#### 4. 検出遺構(第3～6図)

1) 第1トレンチ 概ね、耕土直下(一部床土含む)で遺構面を検出した。遺構面の標高は90.5～91mを測る。遺構は、トレンチ南半部に集中してみられた。ここではそのうち、主要なものについて述べることにする。

SB0101は、トレンチ南半部西側で検出した南北5間(11.2m)以上、東西1間(2.7m)以上の掘立柱建物である。方位はN-10°-Wを示す。柱間距離はP1～P2が2.4m、以下、2.2m、2.3m、2.1m、2.3m、P6～P7が2.7mを測り、不ぞろいである。柱穴も一辺80cm～1m前後の不整形のものが多い。深さは50～70cmを測る。柱痕は径30～40cmであり、一部柱根を残すものもある。桁行5間、梁行2間の南北棟が想定され、比較的大規模の大きい建物である。

SB0102は、SB0101の北約13mの地点で検出した。南北2間、東西1間以上の掘立柱建物である。方位は南北列で、N-12°-Wを示し、SB0101とほぼ同じだが、東西棟になると思われる。柱間距離は、南北列が1.7と2.0m、東西列は南北辺とも2.1mを測る。柱穴は、径20～60cmとそろわない。

SB0103は、トレンチ南端で検出した南北2間分、東西1間分の掘立柱建物である。SB0101の南約15mに位置する。方位はほぼ南北を示す。柱間距離は、南北が2.1mと3.2m、東西が2.4mを測る。また、この建物を囲むように、方位を同じくする溝SD0101、SD0102を検出したが、建物に関連するものかどうかわからない。

SK0101はトレンチの南西拡張部で検出した。SB0101の南約7mに位置する。南北

2.8m、東西4.7mを測り、南西部に幅1.2mの溝が張り出している。また、東部中央付近には径1m、深さ40cmの円形の土壙が穿たれている。SK0101全体の深さは10cm前後と浅く、暗茶褐色粘質土が堆積している。ここからは、縄釉陶器、灰釉陶器、土師器など比較的まとまった量の遺物が出土している。

SK0109はトレンチ北部で検出した径1.5m、深さ50cmの円形土壙であり、井戸跡の可能性もある。土師器が出土している。

SD0106は、SB0101のすぐ北で検出した。北東部が屈曲することより、竪穴住居跡の壁溝の可能性もあるが詳細はわからない。

SR1はトレンチ北端部で検出した幅約14m、深さ60~70cmの東西方向の自然流路跡であると考えられる。遺物は全く含まれていない。

2) 第2トレンチ 耕土直下(一部床土含む)で、遺構面を検出した。遺構面の標高は、北部で90.1m、南部で90.4m前後を測る。

SD0201はトレンチに直交する幅1.6~2.2m、深さ80cmを測る素掘りの溝であり、溝内からの遺物の出土はない。

SA0201は南北約17mに及ぶ、径20~40cmのピット列である。ピットの深さは5cm前後で遺物の出土もなく、性格不明である。

その他、12条以上の溝などを検出したが、いずれも現状の畦畔、土取りなどに伴うものであり、遺物の出土もない。

## 5. 出土遺物(第7・8図)

今回の調査で検出した遺構は、第1トレンチの南半部に集中している。したがって、出土遺物もここからのが大半を占める。また遺構面は、ほとんど耕土直下で検出されており、遺物包含層は存在しない。ここでは、比較的形態の知れるものを中心概要を述べることにする。

1) 縄釉陶器 1~9、19はSK0101、28はP8、29はP9、33~37は第1トレンチ遺構面からの出土である。器種は皿(1~6、29、35)と碗(7~10、28、33、34、36、37)がある。また高台の形態より、接地面内側に沈線をめぐらし段を成すもの(2~5、8、9、28、33、34)とそうでないもの(1、6、10、29、35~37)に大別できる。ここでは前者をA類、後者をB類と仮称する。

A類皿: 2は口径12.9cm、器高2.8cm、高台径6.9cm、同高0.7cmを測る。3は口径11.9cm、器高2.6cm、高台径6.3cm、同高0.6cmを測る。内わんする体部に口縁部は外反し、端部はまるくおさめている。4・5は底部である。4は高台径6.7cm、同高0.8cm、5は高台径6.3cm、同高0.5cmを測る。また内面底部に一条の沈線をめぐらす。高台の形

態は、2・5が厚くかつ低い印象を与えるのに対し、3・4は薄く外方へ踏んばる。器面の調整はいずれも横ナデで、胎土は精良、焼成は硬質のもの（3、4）と軟質のもの（2、5）がある。釉は全面にハケ塗りされており、色調は概ね淡緑色を呈する。

A類塊；8は高台径8.6cm、同高1.0cm、9は高台径6.6cm、同高0.7cmを測る。8は深い体部を有し大型のものである。内面底部に沈線をもつ。高台は高くかつ直立に近い。胎土には若干の砂粒を含み、焼成は硬質、全面施釉で淡緑色を呈する。9の高台は外方に踏んばり、底部には糸切り痕を残す。焼成は軟質だが色調は濃緑色を呈する。33は口径14.3cm、器高4.0cm、高台径6.8cm、同高0.6cmを測る。内面底部に沈線をもち、体部は内わん気味に開いて、口縁端部は外反する。胎土は精良、焼成は硬質で、全面濃緑色を呈する。28・34は底部である。28は高台径6.9cm、同高0.5cm、34は高台径7.7cm、同高0.6cmを測り、高台はいずれも外方へ開く。内面底部には沈線をもつ。胎土は精良で、焼成は28が硬質、34がやや軟質、釉は全面に施し、28は濃緑色、34は淡緑色を呈している。

B類皿；1・29は、輪花口縁を有するが、輪花の数は不明である。1は口径12.1cm、器高2.4cm、高台径6.2cm、同高0.3cm、29は口径13.3cm、器高2.0cm、高台径7.1cm、同高0.7cmを測る。1の高台は低く、外開きし、体部から口縁部は内わんする。幅1cmの輪花を外面からヘラで押しつけている。胎土は精良、焼成は硬質、施釉は全面に及び、濃緑色を呈する。29の高台は断面方形を呈し、体部から口縁部へは外反する。輪花は、口縁端部を刻むように施している。胎土は精良、焼成は硬質、濃い緑色を呈する。6は底部のみで、高台径6.7cm、同高0.5cmを測る。胎土は精良、焼成は軟質、色調は淡緑色を呈する。外面底部には釉が施されていない。35は口径14.8cm、器高3.1cm、高台径6.4cmを測る。高台は断面方形で直立する。体部は内わんし、口縁端部はやや外反する。底部内面と口縁部内面に沈線を有する。胎土は精良で、焼成はやや軟質、色調は淡緑色を呈する。

B類塊；36は高台径7.8cm、同高0.9cm、37は高台径6.7cm、同高0.5cmを測る。高台はいずれも断面方形を呈する。36は大型に属すると思われる。ともに胎土は精良、焼成は硬質である。36は濃、37は淡緑色を呈する。10はあるいは皿になるかもしれない。高台径7.8cmを測り、高台は断面方形を呈し、やや内傾する。底部内面に沈線を有する。綠釉は施されておらず、灰褐色を呈している。

7は口径12.3cmを測る塊の口縁部である。A・B類どちらに属するかわからない。胎土は精良で焼成は硬質、淡緑色を呈する。

2)灰釉陶器 11~20はSK0101、31はSD0105からの出土である。いずれも口縁部は欠失するが塊であると考えられる。

11は高台径9.8cmを測り、外開きする。体部は深く内わんし、内面底部に重ね焼き痕を残す。12は高台径8.0cmを測る。胎土は概ね精良で、焼成も良好、淡～暗灰色を呈する。施釉は12の底部内面にわずかに及ぶのみである。

13～19・31は、いずれも底部のみである。高台径は6.5～7.7cm、同高0.5～0.8cmを測る。高台はいずれも外面下半に面をもつ「三日月」形状を呈しており、内周で接地している。底部外面には糸切り痕を残したままのものが多い。胎土は、小砂粒を含むものもあるが概ね精良で、焼成はやや軟質のものが多い。色調は灰褐色が基調である。いずれも腰部は張らず、高台が付く付近から内わんする体部に立ち上がっている。いずれも底部には施釉が及んでいない。

20は高台径4.5cmを測る瓶の底部である。胎土には小砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。

3) 土師器 21～23はSK0101からの出土である。21は脚台を有する皿である。台は径6.7cm、高さ1.3cmを測り、内わん気味に外方へ開く。皿部は平たい底部に体部は内わんする。横ナデ調整である。胎土は砂粒を含み、焼成は軟質、淡褐色を呈している。22・23は、口径11.0cmと12.4cm、器高3.0cmと2.9cmを測る壺である。体部は深く、口縁部は内わん気味に開き、22では、端部をやや外反させる。調整は横ナデを施す。22の胎土は精良、焼成は軟質、色調は淡橙褐色を呈する。23は胎土に小砂粒を含み、焼成は軟質、淡茶褐色を呈する。

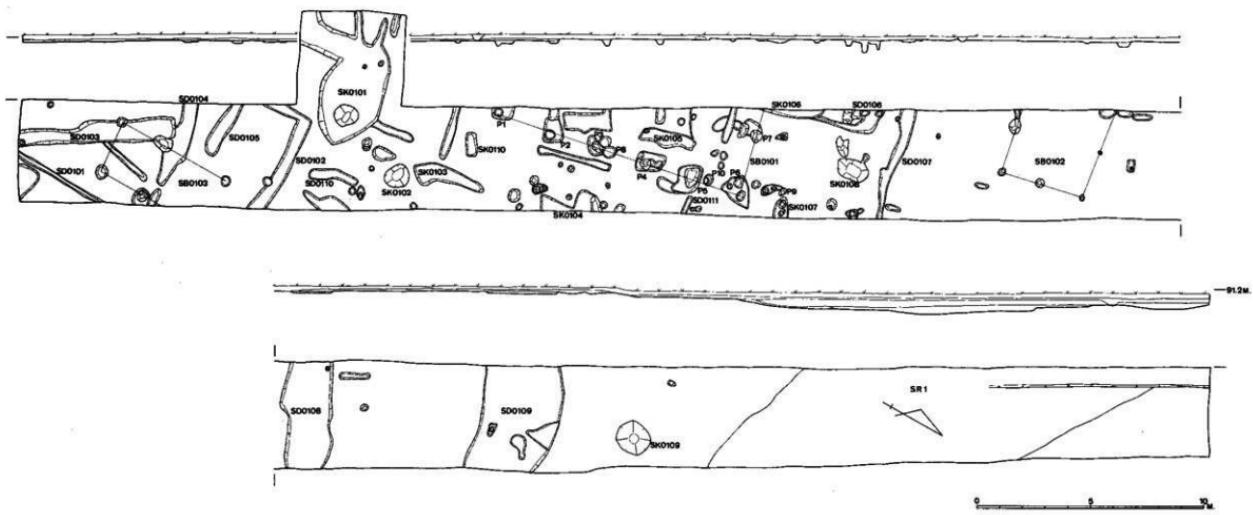
24はSK0109から出土の皿で、口径12.6cm、器高2.4cmを測る。口縁部はやや外反気味で端部をまるくおさめる。調整は横なで、胎土には砂粒を含み、焼成は軟質、淡橙褐色を呈する。

25はSK0110出土の小型皿である。口径8.8cm、器高1.4cmを測る。低平な体部に口縁端部は直立させている。口縁部は横ナデを施し、胎土には小砂粒を含み、焼成は軟質、淡褐色を呈する。

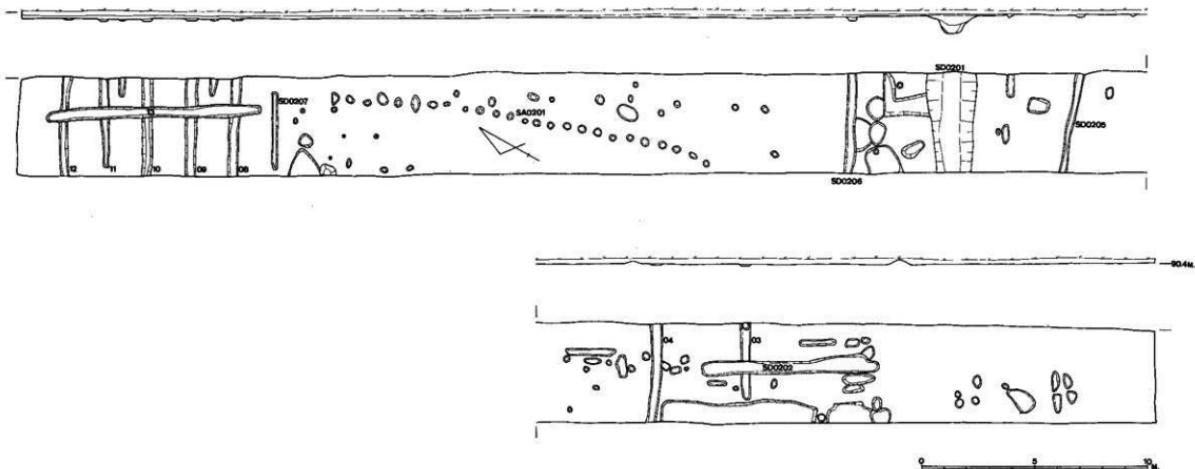
26はSB0101のP5から出土の壺である。口径12.3cmを測る。体部は深く、内わん気味に口縁部にいたる。器面は剥離しており、調整は不明である。

27はP8より出土した高台壺である。口径13.6cm、器高3.9cm、高台径5.9cmを測る。高台は断面三角形状に近く、外へ開く。体部は内わん気味に開き、端部をやや外反させる。調整は内外面とも横ナデで、胎土には砂粒を含み、焼成は軟質、淡褐色を呈する。

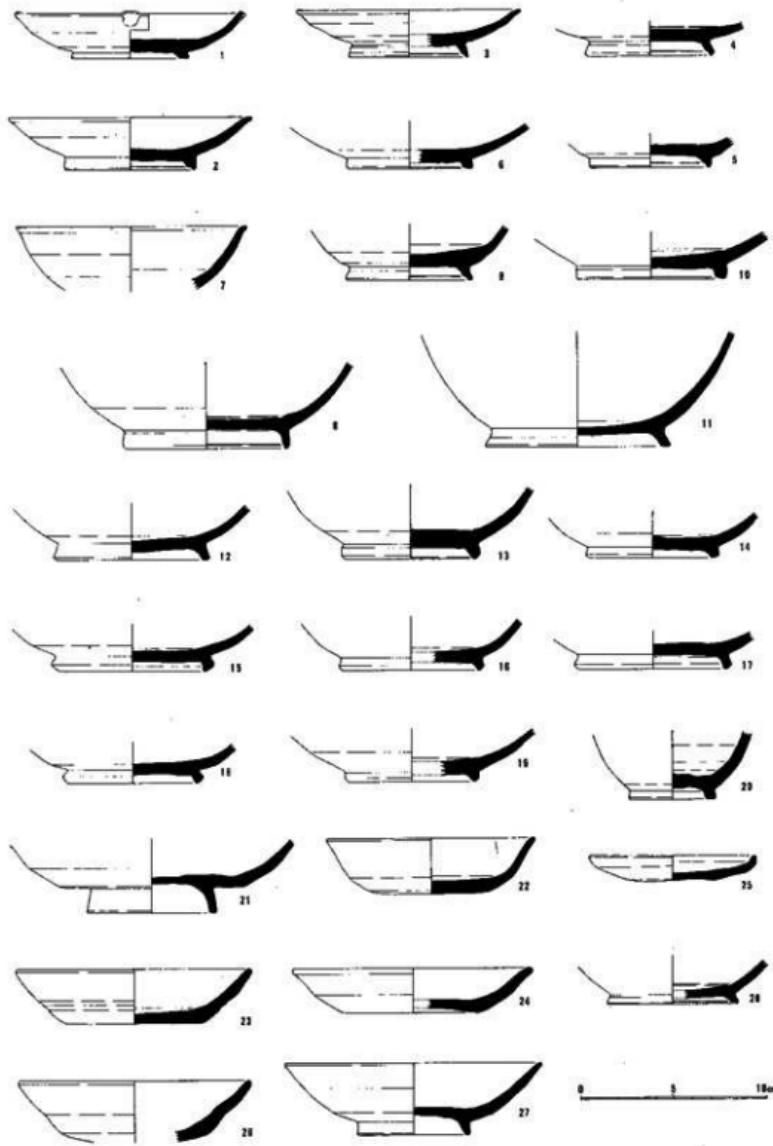
32はSD0111から出土した皿である。口径12.0cm、器高2.5cmを測る。体部は強い横ナデのため、凹凸をもつ。口縁端部はやや外反する。胎土は概ね精良で、焼成は軟質、淡褐色を呈している。



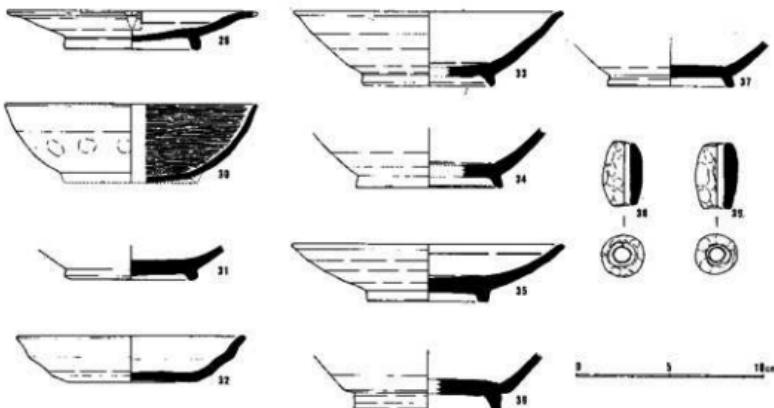
第3図 第1トレンチ造構配置図



第6図 第2トレンチ造構配置図



第7図 出土遺物(1)



第8図 出土遺物(2)

4) 黒色土器 30はP10より出土の塊である。口径は13.4cm、器高は4.3cm前後を測る。断面三角形の低い高台が付くと思われる。体部は深く内わんし、口縁端部はまるくおさめる。器壁は薄手である。体部内面は、横方向の密なヘラ磨きを施す。外面は器面荒れのため、詳細はわからない。胎土には砂粒を含み、焼成は軟質、体部内面と口縁部外面が黒色を呈する内黒の黒色土器である。

5) 土錘 38はSK0101、39はSD0110よりの出土である。ともに焼成の良い土師質で、38は長さ3.4cm、最大径2.1cm、39は長さ3.5cm、最大径2.3cmを測る。中心に0.8cmの円孔をもち、両端をヘラ切りする。

#### 6.まとめ

1) 遺構について 第1トレンチ南半で検出した掘立柱建物のうち、SB0101と02は方位をほぼ同じくしており、同時期に営まれたものと思われる。柱穴からの直接の出土遺物は少なく、にわかにその築造時期を決めかねるが、これらの掘立柱建物のうちで使用された土器がSK0101等に廃棄されたものと考えられる。金剛寺遺跡では、昭和58年度にも同じかんがい排水路の南約200mの地点で、前後3期にわたる掘立柱建物8棟が検出されている。これらの建物群は、およそ半町四方の区画内に同一方位で営まれ、その性格として9世紀末頃～10世紀後半にかけての莊園官舎に類するものが考えられている。<sup>(3)</sup>今回検出した掘立柱建物をはじめとする遺構群も、ほぼ同じ年代幅におさまることより、当然、強い関連性が考えられる。さらに周辺地域にも建物等の存在

が予想され、先の建物群を中心として周辺に倉庫、倉庫等の建物が建ち並んでいたものであろう。

なお、今回の調査では、金剛城に直接関連する遺構・遺物の検出はなかった。

2) 遺物について 第1トレンチSK0101を中心に綠釉・灰釉陶器が出土している。綠釉陶器のうち、A類としたものは貼付の高台内側に段をもち、器面の調整はロクロによる横ナデ、器面全体をハケ塗りで施釉することなどが特徴としてあげられる。また焼成は、施釉前と施釉後の二次にわたると考えられる。これらの特徴は、甲賀郡水口町春日山の神古窯跡<sup>(4)</sup>、同峰道古窯跡<sup>(5)</sup>、蒲生郡日野町金折山古窯跡などの生産遺跡出土の綠釉陶器に見られるものである。したがって今回出土した綠釉陶器A類は、これらの水口丘陵に営まれた綠釉窯のうちで生産され、金剛寺遺跡へ供給、消費されたと考えられる。また、B類に関しても高台の形態以外はA類と特徴をほぼ同じくしており、近江産である可能性をもつ。

次に灰釉陶器は、大半のものが高台が低い「三日月」形を呈すること、底部外面に糸切り痕を残すこと、施釉が口縁部のみの漬けかけと考えられることなどから、折戸53号窯式<sup>(7)</sup>のうちにおさまるものと考えられる。

SK0101の性格については、土器の廃棄壙である可能性が想定され、ある程度の時期幅をもつと思われるが、これらの土器は、平安時代中頃を大きく前後するものではないだろう。SK0101出土の土器の関係を見てみると、綠釉陶器(塊、皿)、灰釉陶器(腕)、土師器(あるいは黒色土器)の組成が考えられる。金剛寺遺跡については、先に見たようにある程度、公的な性格が考えられ、これらの土器は平安時代中期段階のある階層の日常容器の一様相を示すものと言える。

(注)(1) 近江八幡市教育委員会「金剛寺城遺跡発掘調査報告書」(『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書』II 1983)

(2) 近藤滋「莊園官舎とみられる建物群」(『滋賀文化財だより』No86 1984)

(3) (2)と同じ。

(4) 丸山竜平・山口利彦「甲賀郡水口町春日山の窯跡調査報告」(『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』 1975)

(5) 松沢修「水口町峰道1号古窯跡出土の遺物について」(『滋賀文化財だより』No39 1980)

(6) 松沢修「日野町金折山古窯跡付近出土の綠釉陶器類の紹介」(『滋賀埋文ニュース』55号 1984)

(7) 前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』III 1984)



図版一 金剛寺遺跡



1. 遺跡遠景（東から）

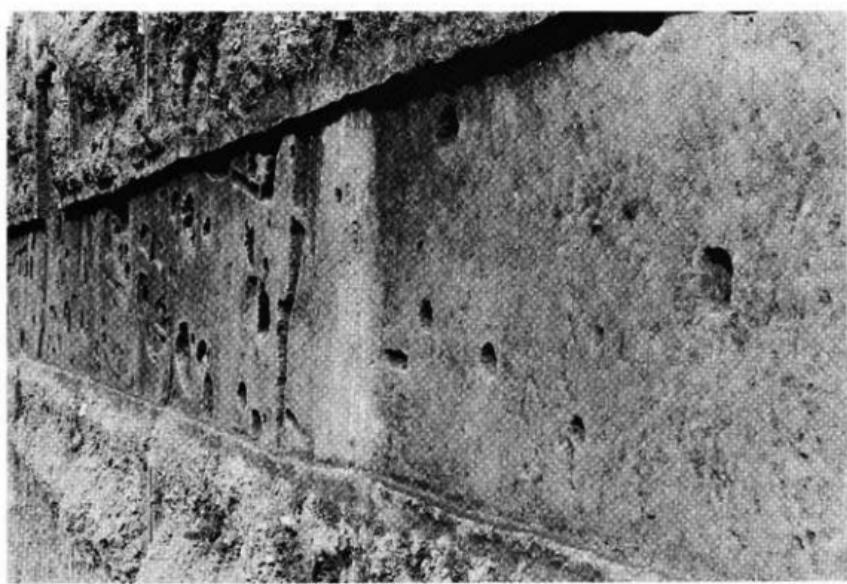


2. 第1トレンチ全景（南から）

図版二 金剛寺遺跡



1. 第1トレンチ SB0101 (南から)



2. 第1トレンチ SB0101・02 (北から)

図版三 金剛寺遺跡



1. 第1トレンチ SK0101

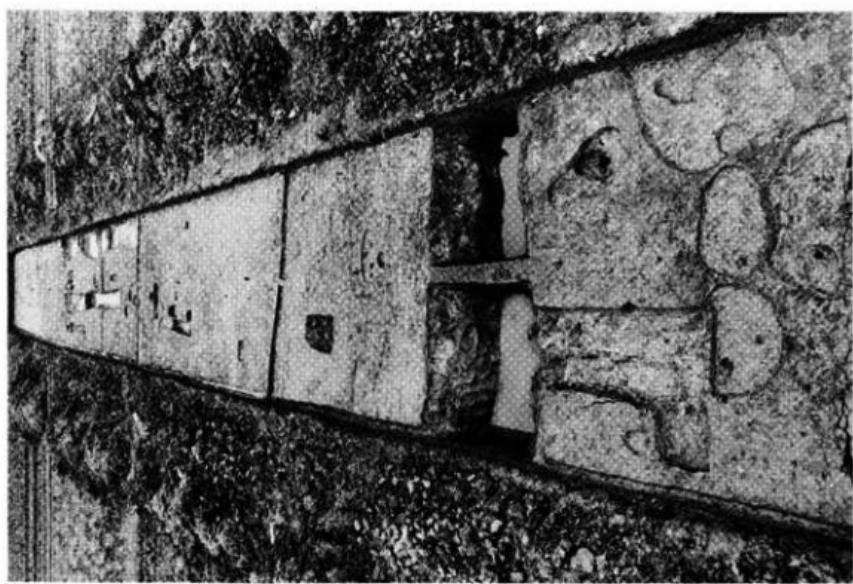


2. 第1トレンチ SR1 (南から)

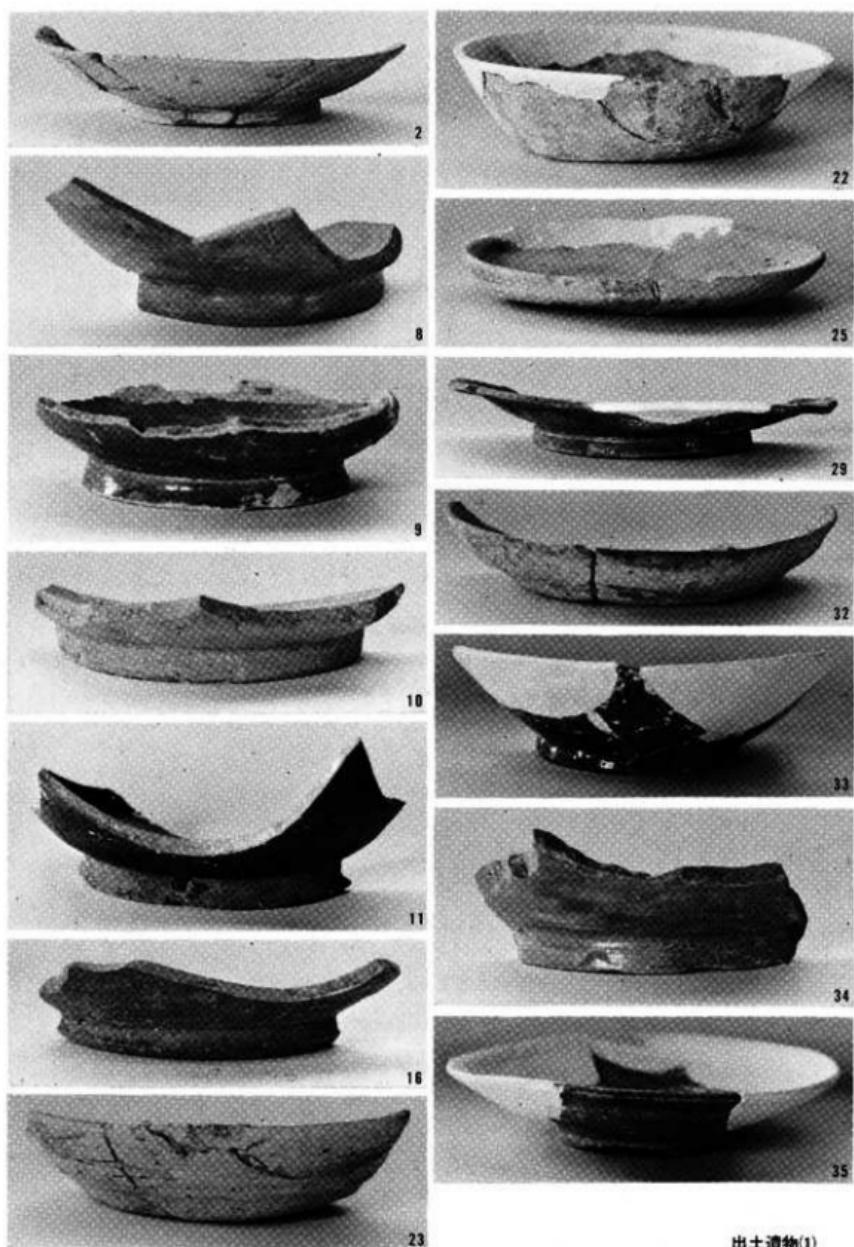
図版四 金剛寺遺跡



1. 第2トレンチ北半全景 (SA0201、南から)

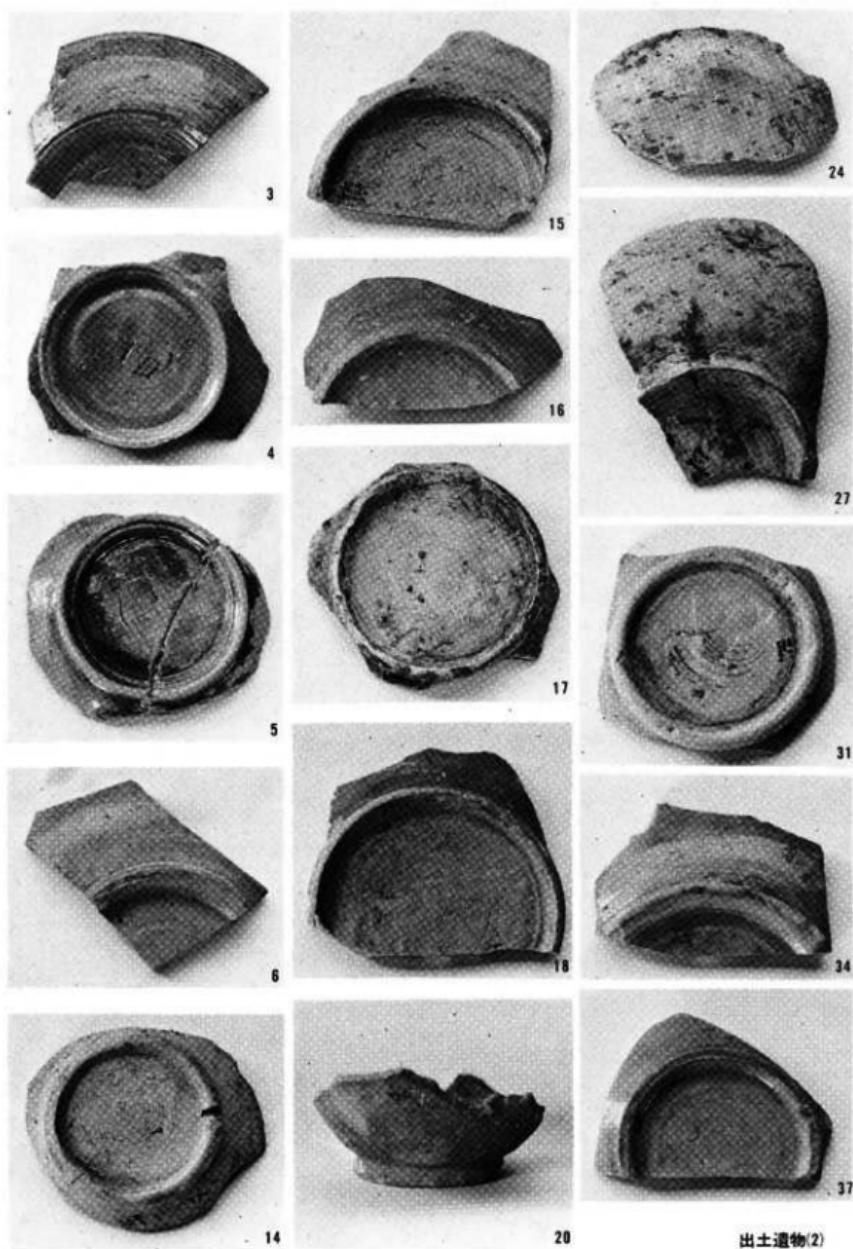


2. 第2トレンチ南半全景 (SD0101、北から)



出土遺物(1)

圖版六 金剛寺遺跡



出土遺物(2)

昭和60年3月

県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書II-1

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 宮川印刷株式会社

大津市富士見台3-18

TEL (0775)33-1241